vol.308

「河内大塚山古墳」案内板とため池

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲近鉄河内松原駅歩道橋上の「河内大塚山古墳」案内板　駅から古墳まで、1290mの距離を示している。

▲府道堺・大和高田線の「河内大塚山古墳前」標示板（西大塚1丁目）　東から西へ。「河内大塚山古墳100m」の案内板もある。

▲樋野ヶ池の小池を利用した「小治ヶ池雨水調整池（雨水流出抑制施設）」　左側フェンスに「河内大塚山古墳」案内板が付けられている。

▲樋野ヶ池と河内大塚山古墳　樋野ヶ池北堤側の商業施設屋上から。右が樋野ヶ池の小島。左奥の森が河内大塚山古墳。南北道は中央環状線（阪和道）。

観光資源の巨大古墳を訪れる 樋野ヶ池・小治ヶ池雨水の活用

松原市は、観光行政に力を入れています。庁内に観光・シティプロモーション課を置き、松原市観光協会や松原商工会議所・阪南大学などと協働して、歴史・文化・産業・スポーツ・グルメなど幅広く市内の魅力を発信しています。

そのうち多くの人々に訪れてほしい歴史遺産として、河内大塚山古墳（西大塚一丁目）があげられます。わが国で五番目の巨大前方後円墳です。世界遺産の百舌鳥・古市古墳群（堺市・羽曳野市・藤井寺市）の中間地域に立地します。六世紀半ば～後半の築造で、この時期では全国一の規模を誇りますので、当時の天皇陵ではないかと推測されます（「歴史ウォーク」266・267）。

そこで、河内大塚山古墳の認知度を広めるため、ネットで発信したり、講演会や見学会を行ってきました。さらに、私は道路上や、最寄り駅の近鉄河内松原駅から古墳に至るルートに案内板を設置することを提案してきました。

おかげで、令和三年秋には府道堺・大和高田線で、これまで河内大塚山古墳の入り口にあたる信号機のある交差点で「西大塚一丁目」と表記されていた道路標示板が、大阪府や地元西大塚町会のご協力で、「河内大塚山古墳前」と変更されました。

また、同府道が河内松原駅方面に向かい、府道中央環状線が高架になる府立大塚高校第二運動場前でも、「河内大塚山古墳」（450m）の案内板が設けられ、人々を巨大古墳へいざなってくれます。

案内板に導かれ、中央環状線の歩道を南へ行くと、右手に樋野ヶ池（上田六丁目）が水をたたえています。江戸時代中頃の宝永二年（一七〇五）六月の「河内国丹北郡松原村明細帳」に、現在の上田・新堂・岡から成る松原村は十一ものため池が所在すると記されています。そのうち、樋野ヶ池は「ひのか池」と表記され、松原村最大の広さを持っていました。「四町七反六畝弐拾歩 長百三拾間 横百拾間」とあります。

樋野ヶ池は昭和四十三年（一九六八）、中央環状線着工のため、東側池敷の大部分が潰廃しました。当時の池敷面積は5.13ha、水面面積5.03ha、貯水量5.00万m³でした。中央環状線開通後も、商業施設や府立松原高等職業訓練校建設（移転。現、松原ポンプ場）によって、2.80haが埋め立てられていきました。

池中央に小島が残り、北東斜面から、六世紀半ばごろの須恵器窯が検出されています（「歴史ウォーク」175）。ここで焼かれた須恵器が、すぐ東方の河内大塚山古墳に供給された可能性もあります。

樋野ヶ池は中央環状線で分断されましたが、道路東側の一部は残り、養魚用の小池となっていました。さらに、今では「小治ヶ池雨水調整池（雨水流出抑制施設）」として活用されています。

もともと、小池の南側には、樋野ヶ池に接するように小治ヶ池が広がっていました。しかし、平成二十八年、住宅地として埋め立てられたのです。そのため、旧小治ヶ池の開発地に「大雨の時、雨水を一時的に貯留して下流へ少しずつ流し、河水や水路の氾濫を防ぐ」調整池が必要となったことから、隣りあう小池が利用されたのです。小治ヶ池の名を冠しますが、雨水施設は樋野ヶ池なのです。

小治ヶ池は、「松原村明細帳」には「かうしか池」とあります。「九反六畝弐拾歩 長五拾八間 横五拾間」とも記します。潰廃前は池敷面積2.10ha、水面面積1.90ha、貯水量2.00万m³でした。

この雨水調整池に、河内大塚山古墳への距離案内板が設置されています。堺・大和高田線の道路標示板とは別に、市は令和四年春、河内松原駅南口陸橋上や陸橋下、柴籬神社（上田七丁目）・中央環状線西大塚歩道橋にも「河内大塚山古墳」への案内板を設置しました。調整池まで来たら、河内大塚山古墳はもう目前です。

過去、松原市はため池の町でした。昭和四十年代以降、市域面積の十分の一を占めていたため池の多くは、潰廃・改変されていきました。観光資源としての河内大塚山古墳の案内板に導かれながら、ため池の歴史にも触れてもらえればと思います。